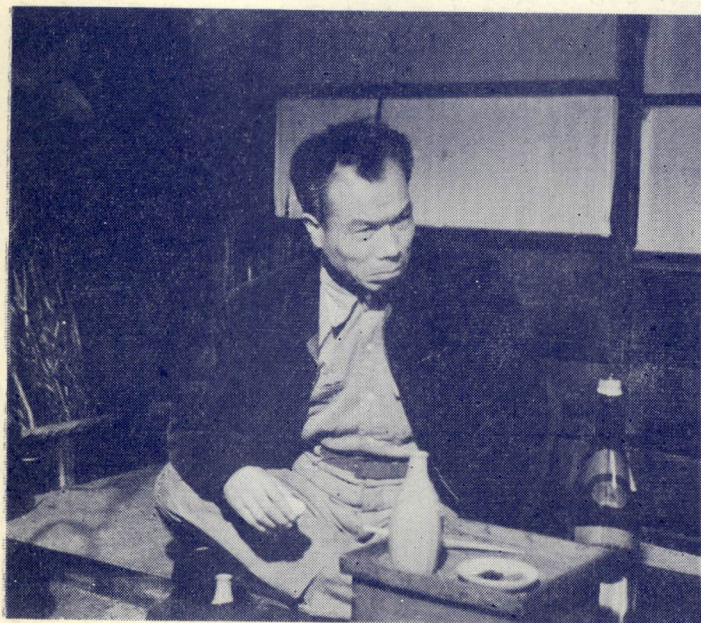


妻と夫が
けんかした話

3
卷

企 画 都道府県選挙管理委員会連合会
後 援 自 治 庁 選 挙 部
推 薦 公 明 選 挙 連 盟
製 作 母 と 子 の 桜 映 画 社

[illegible]

まえがき

この映画には、大ぜいの人たちの選挙に対する不満や願いが織り込まれている。

昨年八月、山口県で開かれた地婦連の大会で、参院選挙のあとなどかえりみ常時啓蒙の必要を改めて痛感し、そのためのよい政治教育映画の製作が決議されたのがそもその動機で、シナリオが出来るまでには各地の婦人会の幹部の人たちはじめ、坂西志保さん、市川房枝さん、或は日青協等の若い人たちの意見も聞かせて頂いたし、無論、自治庁、公明選挙連盟の方々にもお集り頂いた。ロケに際しては長野県選挙、地元筑摩地村の一方ならぬ御協力を頂くなど、明るい選挙を実現したい人達が力を合せて作つたものである。

いわば此の映画が訴えている話しあいと、協力といふことを地で行つたのである。何年目かに必ず訪れる選挙に、この映画が一つの指針になるであろう事を信ずる所以である。

0,000円
映時間34分

都道府県選挙管理委員会連合会

ストオリイ

あわたゞしく解散された国会——山に囲まれたこの静かな山村にも候補者のトラックが入り込んできました。

松三さんは朝から牛を曳いて月例検査に行く村人たちに愛敬をふりまき馬川の旦那の票あつめに懸命です。

候補者のあいさつが風にのつてきこえてきます。

松三さんの妻お浜さんは山の畑でこの演説

16ミリ版	定価	44,000円
長サ	1236呎	上映時間34分
35ミリ版	全3巻	

をきいているうち「思い出すなア、この前の選挙を、おまえもつらかつただろうなア」と嫁の正子をかへりみていうのでした。

それは三年前、正子がお浜さんの息子一郎の嫁になつて間もなくの頃、丁度村は村会議員の選挙でわき立っていました。

「今度の村会議員は亀吉つあなかね」

「ああ、順番だからな」

何もかも順番できめる事が村の平和を守ることだと思つているおやじ連に対して、青年達は立派な政策を持つ人が必ずしも当選出来ない不合理な現実を嘆くのでした。

いよいよ投票の日が来ました。開票の結果、亀吉さんは一票の差で落選しました。やがて、亀吉さんが落ちたのは、他部落からきたばかりの正子が部落の申合せにそむいたからだ——と、冷い取沙汰が集乳場や、小川で洗濯する主婦たちの間でささやかれ、やがて部落全体に噂となつて拡つて行つたのです。

苦虫をかみつぶしたような松三さん……一家の中に冷い空気が漂っています。お浜さんは一郎に「正子は亀吉さんに入れたね」とたしかめるのでした。だが正子は一郎がその人物をほめていた堅井野さんに投票したのでした。選挙は自由だ——という一郎と、世間や親に逆くことは許されない——とする松三さんは正面衝突です。意外に重大になつてしまつた結果に、胸を痛める正子に、一郎は「民主政治だの、正しい政治だのといふ乍ら俺ア心にもなく亀吉さんに入れた——」とあやまるのでした。

こんな一郎と正子を、同じ世代の青年達は支持しはげますのです。「百姓の三男坊は行く処がねえのさ。村の人は橋をかけかえたり道をよくする事位しか考えてねえんだ」「やつぱり先立つものはいふ政治だ。ところがよ、いざ選挙になつてみると皆情実や因縁にとらわれてしまふんだな」「やつぱり、俺達がやらにやア。青年会や婦人会に正しい自由な選挙を呼びかけるんだな」

その頃松三は村の有力者欲野さんの家での宴会で、馬川先生に犬馬の労を誓つていたのでした。

家ではお浜さんが部落の噂や、気づまりな家のふんい気にしよげかえつていろいろばたでしよんぼりしています。そこへ婦人会の会長さんが、近頃さつぱり姿を見せないお浜さんを心配して迎えに来たのです。「正子さんは何も悪い事をしてないんですよ。あなたがそんな気持ちや正子さんがかわいそうじゃないですか。ちゃんと婦人会へ出てみんなと話してみたらどうですか」

お浜さんの悩みをきいた婦人会は「お浜さん、そりやもうあんたんとこばかりじゃないですよ。選挙の事になると家でも息子とおやじさんとけんかばかりしてね」「ヘエー」「わしらにはもう今の若い者の気持がよくわからねエ。こりや一つどうじやろね、青年団の人に来てもらつてみんなで一緒に話しあつたら」に賛成の声が次々に上るのでした。

日ならずして婦人会、青年団、PTAの合同腕くらべ演芸会が公民館



桜映画社作品

さようなら蚊とはえさん	2 巻
厚生大臣賞・教育映画祭最高賞	
百人の陽気な女房たち	3 巻
今どきの嫁	5 巻
おやつ	2 巻
お金と私たち	3 巻
妻と夫がけんかした話	3 巻
松竹配給	
お姉さんといつしよ	5 巻
イーストマンカラー	
日本の近代産業	4 巻

で行われました。満員の人を前にして、誰も知つていない違反行為が面白く劇にされてくりひろげられるのでした。「馬鹿野郎」と違反者に怒りの野次が飛ばされる中で、「ありあ、あんなのことじゃないけ」と言われて流石の松三も頭をかくのでした。

さて、話は冒頭のお浜さんに戻ります。孫の手をひいて山の畑から戻つて来たお浜さんに、相も変らぬ松三は「明日にでも実家に行つてな、票をみんな集めてきてくれ」というのです。丁度野良から帰つてきた一郎は「俺アいやだよ」と断るのでした。けしきばむ松三に、お浜さんも「わたしもお断りしますよ、実家は実家の考え、私は私の考えでいれますよ」といふ切るのでした。

村の道では子供たちが自分たちの書いたポスターを電柱にはつて歩いていきます。「いきなよ母さん、大事な選挙」。この子供たちが成長するころには、農村に立ちふさがる古い壁が次第につきくづされ、この村もつと明るくなつていくことでしょう。

